

「東アジアにおける日本哲学研究—国際学会での対話実践 参加報告書」

京都大学大学院文学研究科2年 小島千鶴

今回報告者は、東アジアでの文化生成・接触・衝突・融合等の諸現象の把握と文化交渉学の進展を目的として行われる「東アジア文化交渉学会」にパネル発表者として参加した。本学会で我々京都大学のチームは「京都哲学と国際化」というパネルテーマのもと、世界的に見ても独自の哲学である京都学派の哲学について国際学会の場で発表することで、他文化との交渉による「世界文化」の成立と発展を目指した。その中で報告者自身は西田幾多郎における他愛の議論を取り上げ、それとキリスト教的立場から論じられたキェルケゴールの隣人愛の議論との対比を行うことで西田哲学の特徴と問題点の一端を明らかにした。このようなコンセプトのもとで発表を行った我々のパネルでは、様々な国籍の方が議論に参加してくださり、さらに哲学や宗教学に限らず幅広い研究分野の方との交流の機会を持つことができた。発表は落ち着いた雰囲気のもとで行われ、発表後の質問は活発であった。短い時間ではあったが充実した議論を行うことができ、その中でいただいた意見や新たな視点は必ずや今後の研究の糧となると確信している。

このような学会での体験に加え、現地上海の街並や史跡を訪れ、実際に目で見、肌で感じるにより異文化に対する理解を深めた。玉仏寺や豫園では日本では見られない色や形の歴史的建築物や仏像、庭園等を目にし、同じ東アジア文化圏でありながらその違いに驚かされた。また30階建てはあろうかという高層マンションがいくつも立ち並ぶ様子や町のにおい、空気、食べ物、現地の人々との交流の中で異文化を肌で実感することができた。このように単なる知識だけではなく実際の経験として中国という国とその文化を知ることができ、研究者としては勿論のこと、人間としての自分の幅を広げる貴重な機会にもなったと感じている。

また報告者にとって国際学会への参加は初めての経験であったが、例えば中国語での発表を別の方が英語や日本語に訳したり、英語での発表者が日本語での質問も受け付けることを一言断ったりと、参加者が互いにフォローしあい配慮しあいながら会の運営を進めている様子が印象的であった。到る所で中国語、英語、日本語の発表や質問が飛び交う会場内はそこに身を置くだけでも非常に刺激的であった。それに加え普段は哲学の発表、哲学の議論のみを見聞きしがちな報告者にとって、全く違う分野の研究成果や研究の方法、研究対象に対する視点の当て方等に触れることができたのは今後の研究の幅を広げるためにも不可欠な経験であったと感じる。

また報告者自身の普段の研究においては特に仏教的視点から西田哲学はじめ京都学派の哲学に対する考察を行ってきたが、今回の学会では主にキリスト教的視点から発表を行ったことで、自身の研究対象に対した新たな見方ができるようになった。それと共に他の研究者の発表テーマであった日本的な「他者」の捉え方や「おのづから」の考え方、あるいは宗教を現実社会の問題として位置付ける考え方等と自分の研究を突き合わせたことで、より一層広い視点で日本哲学を捉えることができるようになり、研究に深みと具体性を増すことができた実感している。

また今後更なる国際交流を行っていくために、他の国の文化に対するより深い知識と、大学で学習した英語や第二外国語に限らない幅広い言語に対する知識を身に付けていきたいと感じた。このような課題に気付くことができたのも、今回のプログラム参加があってこそであったと感じる。

このように今回の学会参加から得られた学びは計り知れず、そこで培った国際的視点は今後日本における自分自身の研究や人生において存分に生かされるであろうと確信している。このような貴重な機会を提供するために尽力して下さったKUASU支援室の皆様には深く感謝申し上げたい。また今後このような国際学会参加の機会が後進や他分野の学生にも積極的に与えられていくことを切に希望する。一人でも多くの学生が国際的な舞台での学びと活躍の場を得ることができるよう、KUASU支援室には今後も一層の体制づくりとその継続を願い申し上げます。